

石行寺境内の石碑（２）

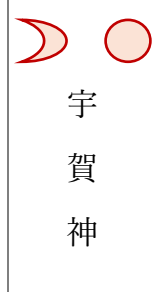
新福山石行寺境内の石碑類（個人の墓石類は除く）を整理した。存置の位置関係は図-29 のとおりで、境内中央部参詣道より西側を対象とする。



図-29

図 30	②7標柱		最上三十三観音七番札所岩波観音、および、その奥の日吉神社については記述しない。
	南面	北面	
		先祖代々之精霊菩提 (一〇八八) 昭和六十三年五月建立 施主 岩波伊藤清左衛門 上桜田 伊藤喜四郎 当山五十六世亮貫代 石工 船越 廣 新福山般若院石行寺	

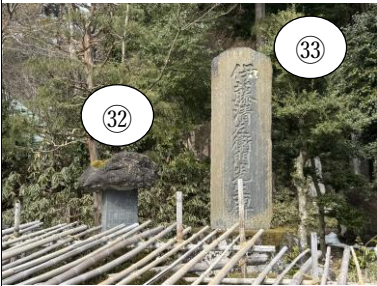
②8石燈籠	②9宇賀神
南面	南面
	
図-31	図-32



宇
賀
神

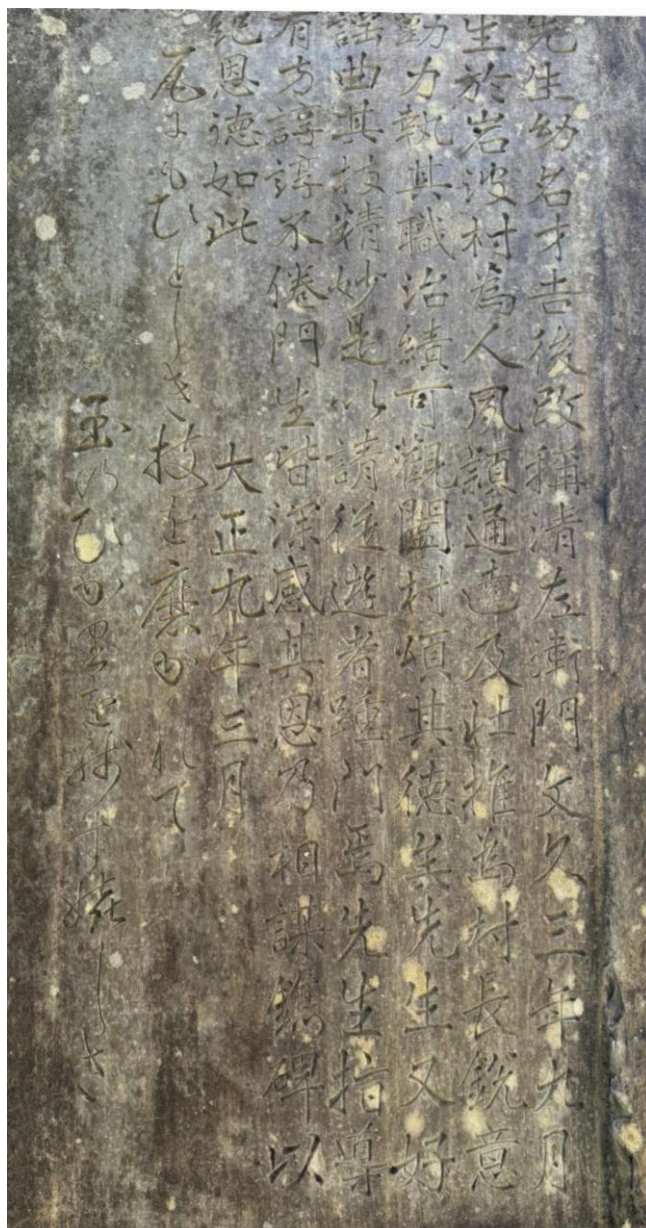
③0石灯籠	③1五輪塔
	
図-33	図-34

「^{うがじん}宇賀神」(うかのかみ)は、日本で中世以降信仰された神で、財をもたらす福神として信仰された。神名の「宇賀」は日本神話に登場する^{うかの}宇迦之^{みたま}御魂に由来するとされる。この蛇神は天台教学に取り入れられて弁才天と習合、あるいは合体したとされ、その合一神は宇賀弁才天とも呼ばれるという。また、弁財天とは夫婦関係という説もある。

③2③3 顕彰碑					
南面	③2南面	③2北面	③3南面	③3北面	幅 96cm×高さ 275cm×奥行 20cm
		人 門 七十一名		伊藤清左衛門先生碑 清左衛門の人となりを刻字 (一〇二〇) 大正九年三月(建立)	
図-35a					

伊藤清左衛門は寺下の生まれで、石行寺の寺侍（寺務に従事した侍）の任に当たりながら、俳句・短歌、詩吟等の文芸達人であったようだ、よって門人（門下生）71 名を刻している。

北面の碑文



先生幼名才吉後改称清左衛門文久三年九月
生於岩波村為人夙顎通□及□推為村長総意
勤力執其職治積可觀闔村頌其德矣先生又好
謡曲其技精妙是□請從遊者踵門焉先生指導
有方諄諄不倦門生皆深感其恩乃相謀鑿碑以
紀恩德如此

大正九年三月

（和歌）・・・

図－35b

③④信仰碑				
西面	南面	東面	幅 32cm×高さ 118cm× 奥行 30cm	
 明和三年戊八月 (1766)	 南無阿弥陀仏	 三界萬霊		
図－36				

③⑤～③⑨ 地藏菩薩碑					
南面					
左から	幅 × 高さ × 奥行				
	③⑤35cm × 60cm × 20cm				
	③⑥20cm × 36cm × 08cm				
	③⑦cm × 36cm × 08cm				
	③⑧cm × 41cm × 12cm				
	③⑨cm × 47cm × 15cm				
					
③⑤	③⑥	③⑦	③⑧	③⑨	
(1782) 天明二壬寅二月廿九日 得寶妙浄信如	(1778) 安永七年 釈尼妙 二月十七日	(1823) 文政八酉天 八月廿三日	刻字なし	(1817) 文化十四十月八日 親光童子	
図－37					

④0～④1 墓石					
			南面		
左から	幅 × 高さ × 奥行				
	④0	80cm × 82cm × 40cm			
	④1	35cm × 70cm × 37cm			
	④2	23cm × 55cm × 22cm			
	④3	43cm × 51cm × 17cm			
	④4	42cm × 53cm × 15cm			
④0	④1	④2		④3	④4
北面 屋根の底下に菊の御門	南面	西面	南面	南面	南面
宇文化六巳七月五日 (1806)	無參道廓涉弥 雪上妙月信女	英山義男信士 得成妙菓大姉 福靄妙榮信女 真心易往信士	直 明治十年四月一日 (1877) 厚 明治廿八年九月五日 (1905) 光 大正九年六月四日 (1920) 得 同十年四月十七日 (1921)	 文政十亥七月十九日 (1827) 法号淨迎信士 寒山智光信士 文化十三子十一月廿八日 (1816)	安永九子天 (1780) 得林安髓信士 六月二十二日
図－38					

④0～④4は明らかに個人の墓石であるが、なぜ、この場所にこのようにあるのか。これは、図－39a のとおりの昔の斎場から持って来たのではないか、持って来たものの個人の墓の区画には置く所がなかったことから（置かれなかったから）“その辺に置けや”となって今日に至っているのだろうか。すると、隣の③5～③9までの地藏尊も一緒に持って来た可能性大である。なお、昔の斎場（現況は同b）には多数の墓石が残されており、お盆になると花が手向けられるものもある。あるいは、そうではなく、寺の役員など上位職を担っていた人達だった故に特権的に山門の入り口に安置出来たのかもしれない。



図－39a



図－39b

④⑤から⑤⑧ 歴代住職墓石群			
南面			
④⑦から⑤④までの円柱型墓石は重なるので右記する		④⑦から⑤④までの円柱型墓石	
幅 × 高さ × 奥行	④⑧ 21cm × 60cm × 21cm	⑤② 32cm × 103cm × 32cm	⑤⑤ 105cm × 240cm × 103cm
④⑤ 63cm × 120cm × 42cm	④⑨ 27cm × 105cm × 27cm	⑤③ 27cm × 80cm × 27cm	⑤⑥ 46cm × 128cm × 31cm
④⑥ 70cm × 203cm × 103cm	⑤⑦ 26cm × 70cm × 26cm	⑤④ 33cm × 90cm × 33cm	⑤⑦ 40cm × 96cm × 38cm
④⑦ 25cm × 72cm × 25cm	⑤⑧ 28cm × 80cm × 28cm		⑤⑧ 31cm × 80cm × 31cm
図－40			

④⑤墓石	④⑥宝篋印塔（2）	
南面	正（南）面全景	南面上部
 法印純應 吳位（一七三〇） 十一月廿六日 享保十五 庚戌天	 石行寺代々之精霊	 光明真言  西面  北面  東面
図－41	図－42a	図－42b

④⑤「^こ叡」とは、はるか、大きい、太陽などの意味があり、したがって、とても位の高い僧侶ということ。

④⑥についての建立年は見当たらない。江戸時代後期の建立と見られるが、細部の書付は見当たらないという。

④7墓石		④8墓石		④9墓石	⑤0墓石
西面	南面	西面	南面	南面	南面
(1812) 文化九申年 権律師昌重 霊位 五月十七日	 権律師 高法	(1849) 嘉永二己酉年 十二月九日	 権律師 昌光 位	(1791) 寛政三亥年 念一院大阿闍梨堅者法印昌寛 零位 十月十日	 (1786) 天明六丙午天 大阿闍梨法印昌舜 塔 六月十四日
図-43		図-44		図-45	図-46

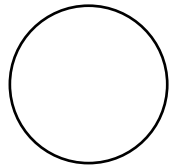
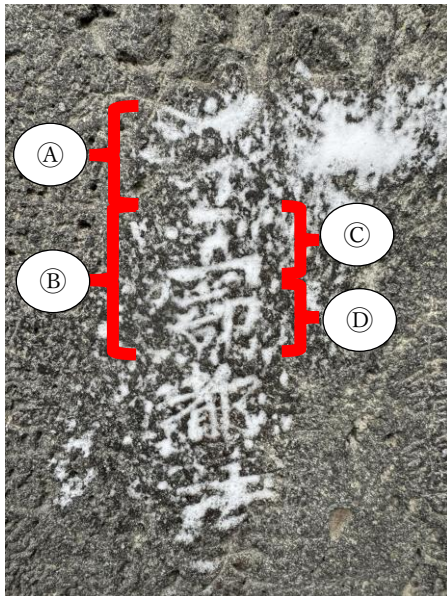
⑤1墓石		⑤2墓石		⑤3墓石		⑤4墓石	
西面	南面	西面	南面	西面	南面	北面	南面
當寺堅者法印舜海 大和尚位 □□□□□□	 ? (1836) 天保七丙申歲十二月二十日	(1844) 天保十五甲辰年二月二十日	 大阿闍梨堅者法印昌圓大和尚位	(1787) 天明七丁未年二月一日	 大阿闍梨堅者法印昌詮大和尚位	(1776) 安永五丙申年十月六日	 常念院権大僧都昌豐大和尚位
図-47		図-48		図-49		図-50	

⑤5供養塔	
南面  有縁無縁六道四生 石行寺 族諸精霊 三界萬霊成等正覚 (じょうどうしょうかく)	四方の梵字  北面  西面  南面  東面
図-51	図-52

五十六世の亮寛住職が昭和 60 年代に再建したとされる。

⑤6 墓石

南面



奉請誦 大乘妙典 □□
三部都法大阿闍梨堅者法印宗海 大和尚
□□□□

図-53

風化著しく建立年を見付け兼ねているのは残念である。

その1；墓石頭部に刻した円弧の印について整理する。仏教の影響で「太陽」や「月」、「輪廻転生」、「永遠」など、様々な意味合いを持つとされている、死者の成仏懇願を仮託した印なのであろう。

その2；梵字は大日如来胎藏界曼荼羅を意味する。

その3；都の上の文字を読めなくて困っていた、私は①と②の組合せと思い、②は一文字と見なしてしまい、調べたが判読しかねていた。市村幸夫さんの協力を賜り、「三③と部④」の組合せであると解読して貰い、意味が繋がった。

ネットで調べたが、「三部都法（さんぶつほう？）大阿闍梨」について、きれいに纏まった説明が見当たらないことからマイクロソフト Copilot、チャット GPT 日本語（無料版）、グーグル Gemini の AI に問い合わせた結果、Gemini の回答が一番整理されていると見たことからそれを記述する。

三部都法大阿闍梨とは、仏教、特に密教における非常に高い位の僧侶を指す称号である。三部都法とは、密教における重要な三つの法、すなわち「胎藏界法」「金剛界法」「蘇悉地法」を指す。これらは密教の教えや実践の根幹をなすものであり、これらを深く理解し、実践できる僧侶が三部都法を修めた者として尊重される。

大阿闍梨とは、阿闍梨（弟子を指導し、教えを伝えることのできる資格を持つ僧侶）の中でも特に優れた能力や徳を備えていることから授与する最も高い位の僧侶を指す。

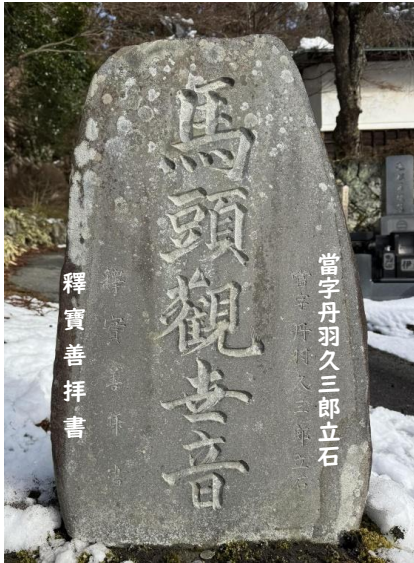
したがって、三部都法大阿闍梨とは、上記の二つの要素を兼ね備えた、密教において非常に高い位を持つ僧侶を指す称号となる。

密教は大きくは台密（天台宗）と東密（真言宗）に分類されるが、いずれにおいても、それぞれの三部都法を修した者に授与しているようである。

その4；「奉請誦大乘妙典」の意味は、奉請誦とは、法要の際に唱えられる偈文（げもん）のことで、菩提を弔う目的で法華経（1000部？）を読誦した記念に建てたという意味であろう。

その5；宗海は⑨念仏講供養碑にも係った高僧（住職）である。

⑤⑦墓石			⑤⑧墓石	
西面	南面	東面	西面	南面
（1920） 大正九年十月五日 遷化 遺弟石行寺現住佐藤寶貫建立	 法印 寶善 位塔 （今の佐藤姓に繋がる 最初の住職）	浄信院貞寶妙善大姉 昭和五年三月十三日 正法院覺算敬機居士同十四年二十九日	故陸軍歩兵一等卒富樫對助明治二十有 七八年從軍日清之後而十月廿日死歿拾 戰地臺嶋牟是當山五十三世代之為佐弟 乃稱寬海廿九年一月本山贈法位 （1901） 當山五十三世 明治三十四年十月 寶善建立	 贈大律師實海法橋上人位
図-54			図-55	

⑤⑨供養碑			
南面	南面	北面	寶善の墓石（拡大）
 寶善の墓石	 馬頭觀世音 當字丹羽久三郎立石 釋寶善 拜書	（1912） 明治四十五年二月初午	 法印寶善塔
幅 52cm×高さ 80cm×奥行 26cm			
図-56			

丹羽家のご先祖は代々馬引き（馬車や馬轎）を生業として来たということを踏まえて建立したものである。馬への感謝と供養を表したものである。馬は農耕や輸送において重要な役割を果たし、人々の生活を支える上で貴重な動物であることから、馬には深い愛情と敬意を抱いていた。懸命に働いた馬が、病気や事故で突然死んだり、老衰で力尽きたりした際に、その霊魂を慰め、供養するために馬頭観音の碑が建てたのである。現代においては広くは交通安全や道中無事を祈願する信仰の象徴となっている。馬頭観音そのものは濁り水を飲み尽くし雑草を食べ尽くすことから、一切の魔や煩惱を打ち消す観音としても信仰されて来たという。

⑥堂宇（弁財天〔2〕）

南面



幅 140cm × 高さ 120cm × 奥行 140cm



図－57

立派な鞘堂で守られた内部には図のと通りの弁財天が祀られている。建立念などは不明だが新しいものである。

弁才（財）天は仏教の守護神である天部の一つ。ヒンドゥー教の女神であるサラスヴァティーが仏教に取り込まれた呼び名である。神仏習合によって神道にも取り込まれ様々な日本の変容を遂げたと言われる。また、弁才（財）天は『金光明最勝王経』（日本では『法華経』・『仁王経』と共に護国三部経の一つ）にも登場し、金光明経を人に説いたり、聞く者に対しては智慧、長寿、富を与えるとされる。よって、庶民には弁天さんと称されて親しまれた。

弁財（才）天というと、図－58（神奈川県藤沢市江島神社 HP）のと通りの琵琶を抱える姿の印象が強いが、人間（民衆）は欲張りだから相反するような両方（強さと優しさ、文武両道）の姿に願いを託したということであろう。

山形県寺院大総覧（同会編纂、山形総合出版社）における石行寺の欄に、主要建造物資産とし、本堂・蔵堂・位牌堂・弁財天堂、観音堂が記載されているが、弁財天堂とはこの㊸堂宇を指す。



◆ 妙音弁財天御尊像 一体
（令和2年2月1日 市指定重要文化財 指定）

「裸弁財天」ともいわれ、琵琶を抱えた全裸体の座像です。女性の象徴をすべて備えられた大変珍しい御姿で、鎌倉時代中期以降の傑作とされています。音楽芸能の上達を願う多くの人々より信仰を集めています。※奉安殿にて公開

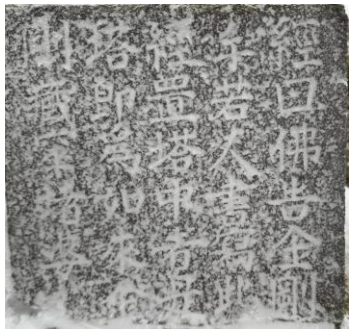
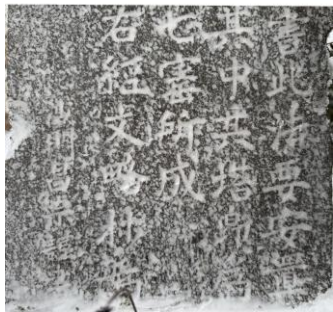
図－58

（檜製 座像 像高一尺八寸）

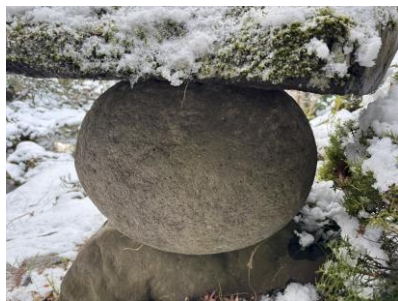
㊸石燈籠	㊸供養塔			
———  幅 52cm×高さ 80cm×奥行 26cm	西面	南面	東面	
	施主 岩屋氏 新助	 南無阿彌陀佛 南無観世音菩薩	（1776） 安永五丙申歳九月吉日	幅 47cm×高さ 80cm×奥行 30cm
図－59	図－60			

㉔草木塔			
西面		東面	
			
石；幅 84cm×高さ 110cm×奥行 83cm		幅 28cm×高さ 85cm×奥行 4.5cm	
図－61a	図－61b	図－61c	

「㉔草木石」は、境内中一番ホットな石碑である、蔵王から調達した凝灰岩赤石である、重量は鉄分を含むことから比重が高く 800kg ほどある、2025(令和7)年5月16日(金)開眼供養を行ったとのことである。この位置には以前(直前より前)は㉔堂宇(弁財天[2])があった。

㉔宝篋印塔(3)			
西面	南面	東面	最下位台座から 幅 53cm×高さ 140cm×奥行 50cm
			
	宝篋印塔		
図－62			

基礎部の三方（西、北、東）に刻字があり、ただ北面は斜面側で読めない。また、建立年は見当らない。

⑥5月輪塔			
南面	東北面	上方	直径（幅）64cm×高さ42cm
			
図-63			

これには月のみの彫刻で、日は描かれていない。月といえば、出羽三山月山山頂神社の月山大権現の祭神は「月読命」、その本地仏は阿弥陀如来とされていた。阿弥陀如来は西方極楽浄土の教主（象徴）とされたことから、浄土思想と相まって阿弥陀信仰は深く浸透して来たということはいうまでもないが、このものについては、寺下や岩波大橋広場の湯殿山碑に鑑みては、湯殿山信仰と対比的に月だけからは月山信仰と結び付いていたという証ではないだろうか。

あるいは「^{がちりんかん}月輪観」瞑想法——①満月をあらわす円が描かれた掛け軸（月輪本尊）を目の高さに置く、②心の中に満月を観じる、③最終的には自己と宇宙が一体になった感覚を得る——ことを意図したものなのか。

屋内にあるものについては本件調査対象外とするが、天神繫がりで次の一つだけを記載する。

⑥6天神様	
	
⑥4①	⑥4②

南無天満大自在天神大政威徳
(1774)
 安永三年八月十五日 山形十日町 大沢氏 権現



形からは天神様

図-64

「天満大自在天神」は、没後の菅原道真を神格化した呼称、あるいは神格化された道真を祀る神社をいう。あるいは、大威徳明王と習合し「太政威徳」とも称される。また、江戸時代寺子屋で流布した『天神経』では、「実道権現」と号されたという。

これは石行寺本堂の檀家休憩室にあるもので、佐藤住職によると、以前、本堂の耐震対策工事を行った時、天井裏（天袋）から発見したもの、泥だらけになっていたことから、元々は外で祀られていたものではないかとされる。

石行寺境内のものについて建立年をキーに古いものから並べ替えてみた、その結果は下表のとおりである。300 年以上も経過した古いものが 2 基もある、にもかかわらず刻字は明瞭である。

建立年判読のものについての年代順は下表のとおり。⑨が一番古く 346 年経過している。

（2026 年から差し引き足掛けの経過年数となる。）

建立年判読のものについての年代順					
整理番号	大分類	建立年	経過年数	バンド	個数
9	供養碑	1680	347	300年以上経過	2
11	手水舎	1716	310		
45	墓石	1730	296	200年以上経過	24
5	供養碑	1735	291		
16	石塔	1760	266		
34	信仰碑	1766	260		
7	石燈籠	1768	258		
8	華表	1768	258		
66	神像	1774	252		
54	墓石	1776	250		
62	供養碑	1776	250		
36	地蔵	1778	248		
44	墓石	1780	246		
14	供養碑	1781	245		
35	地蔵	1782	244		
50	墓石	1786	240		
53	墓石	1787	239		
49	墓石	1791	235		
18	庚申塔	1801	225		
40	墓石	1809	217		
47	墓石	1812	214		
2	庚申塔	1814	212		
43	墓石	1816	210		
39	地蔵	1817	209		
17	供養碑	1819	207		
37	地蔵	1825	201		
10	香爐	1828	198	100年以上経過	17
51	墓石	1836	190		
52	墓石	1844	182		
48	墓石	1849	177		
1	地蔵	1867	159		
42	墓石	1877	149		
6	石燈籠	1897	129		
58	墓石	1901	125		
19	華表	1912	114		
22	石燈籠	1912	114		
24	石燈籠	1912	114		
59	供養碑	1912	114		
3	観音堂標柱	1918	108		
12	石燈籠	1920	106		
32	顕彰碑	1920	106		
33	顕彰碑	1920	106		
57	墓石	1920	106		
13	供養石柱	1936	90	100年未満	3
27	標柱	1988	38		
63	草木塔	2025	1		
46					46

(end)